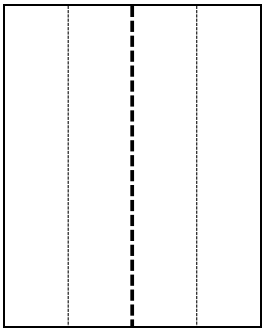
書写授業Ｑ＆Ａ

藤井　浩治

１．半紙はどのように折ればよいのか。

○半紙は縦に４分の１の折ればよい。



・文字の中心を確認する意味で中心の折り目は必要。
・横画の長さを確認するため両端の折り目も必要。
例(折り目に届かない短い横画。はみ出るくらい長い横画。)
・手本も同じように折って、折り目からどれくらいの位置かを比較しながら書かせる。

２．名前の位置は折った方がよいのか。

○半紙１字や２字の場合は名前のスペースを取っておかなくても充分書くことができるので不要。
○半紙３字の場合は４字目のスペースに書けばよいので不要。
○半紙４字、５字の場合はスペースが苦しい場合がある。その時は１.5 センチくらいの折り目をつける。折り目の中に書くのではなく、折り目を名前の中心として書く。

３．後かたづけの方法はどうすればよいか。

（１）すずりの始末

①残った墨を筆につけて、いらない半紙（練習した半紙）に墨が無くなるまで塗りつける。
（高学年になったら残った墨を吸い取っても良いが、本当は使い残しをまぜない方が良い。）
②いらない半紙ですずりの丘の部分や海の部分をふきとってきれいにする。

（２）大筆・小筆の始末

＜その１＞
①書写用のバケツ（百均）２個に水を入れて雑巾を下に敷く。（書写係に準備させる）
②いらない半紙を４分の１にたたんで大筆といっしょにバケツの所に行き、ゆっくりかきまわして洗う。バケツのふちで穂先の水を押さえてからたたんだ半紙でぬぐう。
③ぬぐった半紙（水でしめっている）を自分の席まで持ち帰り、机の上で小筆の先（墨の付いた所）だけぬぐう。
＊小筆はのりで固めたまま使用するので絶対に水につけて洗ってはいけない。
④大筆と小筆を筆巻きにまく。
⑤書写係がバケツの水を捨て、敷いてあった雑巾で床を拭く。
＊バケツの位置は廊下など教師の目の届かないところに置くと床を汚しやすい。
教室の前など教師のすぐ見える場所に置く方がよい。
＜その２＞
①２５０ＣＣのペットボトルを児童個々に用意させ、授業の前に水を入れさせる。

②机の上でふたを開けて、大筆の穂を差し込んで洗わせる。
③倒れてはいけないので、すぐにふたをする。
④いらない半紙で大筆をぬぐう。大筆をぬぐった（ぬれた）半紙で小筆の先だけ拭く。
⑤大筆と小筆を筆巻きに巻く。
⑥児童が個々に水を捨てて、ペットボトルは所定の場所（個人ロッカー等）に納める。
＊ペットボトルの底に牛乳パック（高さ５センチ）の受け皿を貼り付けて倒れにくくまた垂れにくくしたり工夫もできる。

４．新しい筆のキャップはどうするの。

○新しい大筆の透明なキャップは捨てること。
販売したり出荷する時に穂先が痛まないようにカバーするためのものなので捨てさせる。大筆を洗った後にキャップをすると乾燥しないのでカビが生える。
キャップが割れて指を切ったり、指にはめて遊んで取れなくなる危険がある。

５．初めて筆をあつかう３年生に約束させることは何。

○大筆は振り回さないこと。
大筆を洗った後に子どもは大筆の水を切りたくて、ふりまわすことがある。他の子どもの服に付くので、筆は絶対に振らないことを約束しておく。
○体操服で授業を受けないこと。
・墨は一度服につくと取れません。４月、５月は暑くても授業の最初に制服を着ているか確認してから授業を始めます。
・衣かえをしてからは、書写用のエプロンを付けさせるか、汚れても良い服に着替えさせると良いでしょう。高学年になると夏服のままでも汚さないようになります。

６．手本は教科書をそのまま使うのか。

○実物大のものを使った方がよい。
・教科書の手本は半紙よりも小さいものが多い。小さい字を見ながら大きく書くことは子どもにとって高度な要求となる。教科書を半紙大に拡大コピーして印刷して個々に持たせると良い。
・指導書の付録に半紙大の手本がついていることが多いので、それを印刷する。
○ベストは大きく太い手本を与えた方がよい。
・教科書の手本は標準的な大きさで書かれている。子ども達には大きくのびのびと書かせたい。教科書を半紙大より少し大きく拡大し、文字を切り抜いて半紙に貼ってから印刷して使用する。

７．練習した半紙が床に散乱しないようにするにはどうすればよいか。

○「紙ばさみ」を作って、机の横にかけさせるとよい。
・「紙ばさみ」（スケッチブックのようなもの）を個々に作らせておき、書写授業の準備をするときに机の横に掛けておく。半紙を書き終わる度に紙ばさみに入れさせる。

８．速く書いた子どもが遅い子を待てないで集中しない時どうするか。

○速く書いた子どもは、自分の書いたものと手本とを比較させ、直すとことを見つけて手本の方に鉛筆や赤鉛筆で書き込みをさせて待たせる。

○「割りばし」を２本使って、手本と自分の書いたものの上にのせ、画の長さや、傾きの違いを調べさせて待たせる。

９．教師の所へ添削に来させていると、順番待ちをしている子どもがさわぐのはどうすればよいか。

○持って来させての添削はしないほうがよい。

・教師が机間を回りながら本時のねらいが出来ているかどうかを口頭で評価するとよい。特にできていない子どもには子どもの筆を使ってその場で指導する。

１０．左利きの子どもはどうすればよいか。

○大筆は右で、小筆は左のままでもよい。

・鉛筆の場合は左でも書くことができるが、毛筆の場合左手で書くと、書いている字を手が隠してしまう。つまり毛筆は左利き用にはできていないので、右で書かせた方がよい。初めて筆を持つときが重要で、上記の説明をした後、「大筆は大きい字を書くから、右手でも書けるよ。」と右手に持たせるのがこつ。左で少し書かせてしまうと持ち換えることが難しくなるので、初めて筆を持つときが勝負である。

・小筆は小さい文字を書くので、鉛筆と同じ感覚であるため、左のままでも良い。

１１．筆はどこを持てばいいのか。

○初めて筆を持つときは真ん中より少し下を持たせる。

・大筆は軸の下を持つ程動きが小さくなるため、軸の上の方を持つ方がよい。しかし、初めから上を持つのは難しいので、真ん中より少し下を持たせて慣れてくると徐々に真ん中より少し上を持たせるようにすればよい。

・小筆は鉛筆のように机の上に手を載せて筆記するので、できるだけ軸の下を持たせる。

１２．個別に添削指導する時間がない。どうすればよいか。

○練習用紙を使って一斉に指導する。

・かご字練習用紙の作り方。
　手本の上に半紙を載せて、一画づつ鉛筆でふちどる。それを印刷して使用する。

・骨字練習用紙の作り方。
　手本の上に半紙を載せて、小筆などで画の中心をなぞる。それを印刷して使用する。

・指導書の付録に練習用紙がついている場合がある。すぐに印刷して使用できる。

１３．子どもの前で書いて見せなければならないか。

○書かなくては指導ができないということはない。

・絵を描けなくても図工の指導のうまい教師はいる。体育の見本を見せなくてもうまく指導のできる教師はいる。書いてみせる授業をしても良いし、書いて見せないで文字をどのように構成すればうまく書けるかを考えさせる授業をすればよい。

１４．授業で何を教えればよいのか。

○教科書の「単元名」がそのまま「授業のねらい」となっている。それを教えればよい。

＜例＞４年「画の長さ」羊

・「横画の長さ」に気をつけて「羊」を書くことがねらいである。

羊　「『横画』が複数ある場合、一本だけ長く書く」という原則を知る学習である。

＜例＞５年「大きさ（漢字とかな）」花さく町

・「漢字と仮名の大きさ」に気をつけて「花さく町」を書くことがねらいである。

花さく町　「漢字は大きく。ひらがなは小さく書く。」という原則を知る学習である。

１５．授業はどう進めればよいのか。

○①試し書き　②原則（ねらい）の発見・理解　③試書の批正　④練習　⑤中間批正　⑥練習　⑦まとめ書き　⑧評価　の流れが一般的。

＜例＞４年「画の長さ」羊

①試し書き＝ねらいを意識しないで「羊」を１枚書く。

②原則の発見・理解＝「羊」の横画の長さはどのように書くと整うのか考える。
「横画が複数ある場合は１本だけ長く書く」という原則に気づく。（発見）

③試書の批正＝自分の書いた「羊」（試書）の横画がどうなっているか確認する。

④練習＝一本だけ長く書いて整えるように練習する。

⑤中間批正＝自分が練習した「羊」の横画がねらい通りになっているか確認する。

⑥練習＝練習用紙などを使用して更に定着する。

⑦まとめ書き＝最後に練習の成果を生かして１枚書く。

⑧評価＝試書とまとめ書きを比較しながら、良くなったところを自己評価や相互評価する。

１６．単元はどう進めるとよいのか。（３時間扱いの場合）

○①原則の発見・理解（毛筆）　②原則の定着（毛筆）
③原則の応用・他字への応用（小筆や他の筆記具）の流れが一般的。

１７．１回の授業で何枚書けばよいのか。

○多く書けばうまくなるというのではない。

・「ねらい」を達成しようという意識を持たないで書いた場合、数十枚書いたとしても１枚目と同じ所を失敗していて進歩がないことになる。１枚書く毎にどこを修正していけばよいか手本と比較しながら考えて書けば、枚数が少なくても１枚書く毎に良くなってくるのである。

１８．筆はどこまでおろすか。

○大筆は根本まで全部おろして、たっぷり墨を含ませて書けばよい。墨持ちも良く、線の太い細いの変化もよく表現できる。小筆は１センチくらいおろして穂先だけ使って書く。

１９．根本の固くなった大筆はどうするか。

〇穂先を水につけ置きする。

・大筆は手入れをよくしておかなければ、根本に墨がたまって割れ癖がつく。太い線が書けなくなり、墨持ちも悪いのですぐにかすれてしまう。穂の根本が固くなると水道で洗ったくらいでは元のように柔らかくならない。絵の具の「筆洗い」などに水を入れ、筆の穂の部分を１日（場合によっては数日）浸しておくと柔らかくなる。それからシャンプーなどでよく水洗いしてやると元の状態に戻る。しかし、本当は水に長時間浸すことは筆のためには良いことではない。日常の手入れが重要である。

２０．文鎮はどこに置くか。

〇半紙の上部にななめに置く。

・半紙の上部に横にして置いた場合、文鎮がじゃまで文字が下がってしまうことが多い。ななめに置くとじゃまにならない。短い文鎮が２本のものもあるが、半紙上部の左右にななめに置くことができるように工夫されているからである。

２１．固形墨はいつ使うのか。

〇小筆を使った授業の時に使用できる。

・大筆の授業１時間で使用する量を固形墨で水からすった場合、すり終わるまでにほぼ１時間要する。つまり、すり終わった時点で授業時間も終了である。固形墨の使用は無理にしなくても良いが、小筆を１時間使用する授業であれば、墨の使用量が少ないため使用することが可能である。

２２．掲示はどうするか。

〇掲示用シートにはせると短時間で手軽に掲示できる。

・ビニル製の展示用シートは連結も自由であり、手軽に掲示できる。道具の片付けの終わった子どもから順に自分の「まとめ書き」を自分でシートに入れさせればよい。

２３．さばけてしまった小筆はどうすればよいか。

〇墨をつけたまま乾かすと固まるので､固めた後で穂先１センチくらいを下ろして使う。

・小筆は穂先がすりへってしまうと寿命である。大筆と違って消耗品なので、買い換えることが必要。小筆の場合、値段のあまり高いものは買わなくて良い。

＊大筆は１０００円以下のもはすぐに書けなくなるのでやめた方がよい。

２４．名前の手本はどうするか。

〇個別に書いてやれば良いが、書けない場合、子どもの名簿をワープロソフトの筆文字（ＨＧ正楷書体－ＰＲＯ）に変換して配ってやれば書く必要なし。